

| 氏名 | 発表タイトル | 発表内容 |
|--------|--|--|
| 有賀 慎平 | 道徳を含む教科横断学習をp4cで！ | 特別の教科となった道徳と、各教科を横断的になるよう学習を計画してみました。 p4cのよさを活かして、道徳及び各教科で対話し、それぞれの学習を深めたいと思い実践しています。 |
| 小川 泰治 | 「高専てつがく」の試みの中間報告 | 発表者は今年度四月より山口県の宇部高専に講師として着任し、p4cをヒントにしながら日々倫理や現代社会の授業を進めています。まだまだ始まったばかりで成果らしい成果はまだないのですが、新しい環境で少しずつ取り組んでいる実践の様子を紹介します。正直に今難しく思っていることや課題やこれから取り組んでみたい新しい挑戦についてもみなさんとお話できればと思っています。 |
| 北浦 貴之 | これってベンキョウなんですか？ | 富士山の裾野にある小学校で、こどもたちとの対話を試みて4年。これまでに発せられたこどもたちの問いやこどもたちの声、綴られたこどもたちのことばを紹介するとともに、学校でこどもたちと対話することの可能性をいっしょに探りたいと思います。「レクとはちがう、みんなと話す楽しさがあるからいつも楽しい。」対話することで起きたこどもたちの変化、教室や学校の変化、教師であることの変化、じぶんの変化を語り合えればと思います。 |
| 高藤 真意 | 「問い」が生まれる国際理解教育をめざして— p4cのアイデアをてがかりに— | 異文化理解、他者理解、といった言葉を国際理解教育という教育活動ではよく耳にする。そこでは、課題や「違い」や「同じ」ということが、既に「ある」ものとして、子どもたちの前に提示され、それについての「理解」を迫る。果たして、課題に対する認識や、「違い」や「同じ」は、皆に共通した「普遍的」なものなのだろうか。子どもたちの疑問や不思議に耳を傾け、問いが生まれる国際理解教育を、p4cと共に考えてみたい。 |
| 田邊 瑞歩 | 「サイレントマジョリティーにならないための女子校 p4c」 | 「女子」の世界に身を置いたことのある人、こんな経験はありませんか？ 本当に思っていないでもつい「うん」と答えてしまうこと。勝手にその人がどんな人であるか判断をし、その人の意見を深く信じ込んだり、その逆に耳を傾けることさえしなかったこと。…きっといろいろはず。p4cをきっかけに「他人の考えを聞いて、新しい発見があった」と言えるということは、まさに「女子」の世界から一歩外へ出たことを表しているのではないのでしょうか。 |
| 村瀬智之 | 上級生による子どもの哲学の司会進行の試みとその意義 | 高等専門学校（通称「高専」）は、中学校卒業後に入学する五年制の高等教育機関であり、5年卒業後、さらに2年間の専攻科を設置している。 今回の発表では、高専入学時に子どもの哲学をベースとした授業を受講したことのある専攻科の学生が、1年生の授業に参加し子どもの哲学の司会進行を行った様子を報告し、その意義について考察する。 |
| 森 秀樹 | 問いに行き当たるには | 問うべき問いを言葉にするのは難しい。ひっかかりを感じることをがらを単語にするだけで精一杯のことも多い。それとても、一つのスタート地点ではあるが、論点をなかなか共有できない。問いの論点を意識化するために、どんなことができるだろうか。 |
| 内田 桃子 | 哲学対話における高校生の「建前」と「本音」 | 近年、日本の学校現場で哲学対話が徐々に取り入れられてきているが、具体的には哲学対話により子どもは何をどのように学ぶのであろうか。子どもの学びを捉えるためには、哲学対話中の観察だけでは心もとない。そこで発表者は、高校生を対象に哲学対話を実践し、参加生徒に対してアンケートやインタビューを行った。定量的／定性的データを取得し分析することで、授業中の言動からは窺い知れない学びの軌跡を捉えることができた。 |
| 角田 将太郎 | こども哲学向け絵本ナンバー1はどれだ！？ | こども哲学を行なう際の道具として絵本は特に代表的なものです。絵本には様々な力があり、その1つとしてこどもたちの哲学的活動を誘発する力を持っています。ただ、絵本の内容によってはその力の有り様は少しずつ異なります。いったい絵本の何がそのような力の差異を生み出しているのでしょうか。そして、数多くある絵本の中でどの絵本が最もこども哲学に適しているのでしょうか。 |
| 金澤 正治 | コミュニティボールがくれたギフト | 4月。毎年必ずクラスの子供達と輪になってコミュニティボールをつくる。はまっていることをドキドキしながら話す。糸をまくことが話す力を与えてくれる。みんなが聞いてくれた。うれしい。みんなの話聞くのが楽しい。 コミュニティボールはふわふわで気持ちがいい。さわっていると落ち着く。さわっていると語るべきことがうかんできくる。安心感を与えるボール。 コミュニティボールはすてきなギフト。 みんなで語り合ったすべての時を刻むアイコン。 |
| 北海 陽子 | 日本の中学生の社会性と情動学習スキルに及ぼすこども哲学（哲学対話）の効果 | 現代の子供達はいじめ、登校拒否、引きこもり、自殺などの深刻な問題を抱えている。こうした社会問題の原因として、過度の受験競争、教室における集団思考への同一化、一つの答えを求める知識詰め込み型教育、といった教育の問題が指摘されている（Panda, 2017; 福原, 2012 & 文部科学省, 1998）。文部科学省は「これからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようとしても自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性である」と主張している（文部科学省, 1998, 2010, 2013）。したがって、予防的・開発的生徒指導として、子どもの社会性を育てるための心理教育プログラムが導入、実施されており、その効果が報告されている（例：安藤, 2010; 小泉, 2007; 国立教育政策研究所, 2017）。これらは、総称して社会性と情動の学習(Social and Emotional Learning、以下 SEL とする)と呼ばれている。 SEL とは「自己の捉え方と他者との関わり方を基礎とした、対人関係に関するスキル、態度、価値観を育てる学習」である(小泉, 2011)。日本では2000年以降から情動知能や社会性と情動スキルについての研究が盛んに行われるようになった(例：安藤, 2010; Ikesako & Miyamoto, 2015; 香川&小泉, 2007; ベネッセ, 2015)。小泉(2008)は社会的能力を基礎的社会的能力と応用的社会的能力に大別し、8つの社会的能力の育成を目標としている。基礎的社会的能力は自己への気づき、他者への気づき、自己のコントロール、対人関係、責任ある意思決定の5つの能力から成る。応用的社会的能力はこれら基礎的社会的能力に支えられる能力であり、生活上の問題防止のスキル、人生の重要事態に対処する能力、積極的、貢献的な奉仕活動の3つの能力から成り立っている。 原来、研究者は、将来の収入と雇用を予測する学術的成果と高いテスト成績に焦点を当てており、これは国の経済発展につながる可能性があるとしめた。しかし、近年の研究は、将来の人生にとって重要である協同性や自尊心などの非認知的スキルに焦点を当ててきた(国立教育政策研究所, 2017; Ikesako&Miyamoto, 2015)。社会性と情動の学習は、豊かな教育の重要な部分で、学業成績を向上させるための重要な支えであることを示している。 現在、アメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリスなど数多くの国で実践・導入され、さまざまなタイプのSELプログラムの評価が500以上あり、数千の学校が米国や他の国々でSELプログラムを実践されている。日本ではすべての子供を対象とした予防教育として、社会性と情動の学習に関する研究が進展しつつある。よってこの研究ではこども哲学アプローチが中学生の社会性と情動のスキルにどのような効果を与えるかを調査する。 本研究は、質的事例研究である。調査対象者は神戸大学付属中等学校の35人の学生である。調査期間は2018年4月から9月を予定している。データとして、アンケート、教室でのディスカッション場面のビデオ録画、学生に対するフォーカスグループ、教師へのインタビュー(半構造化面接)、学生自己評価シートを収集する。収集されたデータは、データ分析ソフトウェアを用い、コーディングによってカテゴリー化し、内容分析を行う。その後、分析データを考察し、日本における今後のこども哲学アプローチの実践方法について提案を行うことを目指す。 本口頭報告では、本研究の経過報告と調査から得られた知見を報告する。 |

| | | |
|--------------|-------------------------------------|---|
| <p>富田 航佑</p> | <p>一般高校での p 4 c 導入授業案 (公民科ver.)</p> | <p>大学入試制度改革により、生徒の思考力育成は急務である。p4cで他者の意見を受け入れつつ自分で考えていくことは、生徒の思考を深める手助けになるだろう。p4cの実践自体はかなり魅力的であるが、高校になると大学受験が控えておりなかなか実践に踏み込める環境ではない。今回の実践の目的は、一般高校ではどのような形でp4cを導入するのが適切かを試すことにある。現在は中間期末テスト返却時に大集団のp4cを行い、日ごとの授業の導入10分でプチ哲学カフェを班ごとで実践している。</p> |
| <p>菱田 伊駒</p> | <p>「セーフティと身体」</p> | <p>Dr.Jはp4cにとって重要な考え方である<セーフティ>は、<身体的にセーフである>、<感情的にセーフである>、<知的にセーフである>の3つの要素からなるという。発表では<身体的にセーフである>ことについて考える。</p> <p>人に見る/見られる、言う/言われる、触れる/触れられる、そのような関わりを通じて疲労が生まれる。疲労は身体に蓄積されていき、次第に私たちをセーフティから遠ざける。</p> <p>私はどのようにセーフティから遠ざかったり、近づいたりするのか。そのプロセスを発表によって少しでも明らかにできればよいと思う。</p> |